

【修士論文研究ノート】

ウィトゲンシュタイン『哲学探究』における

「われわれ」

— §185 の生徒の位置づけ

菅崎 香乃

序言

1 『探究』 §185 の検討

1.1 問題提起

1.2 問題への解答

1.3 §185 の「われわれ」

2 §185 の特徴

2.1 §§139, 200 の特徴

2.2 §185 の特徴

2.21 §185 の生徒が「われわれ」にもたらす影響

2.22 「われわれ」の恒常性、平和な一致

3 三つの解釈—§185 の生徒の位置づけ

3.1 クリプキの懐疑論者

3.2 ダメットの純粋な規約主義

3.3 ウィリアムズ、入不二の超越論的な「われわれ」

4 手稿 MS124 が示す可能性

4.1 MS124 pp.149-151 の検討

4.2 『探究』 §185 の生徒を位置づける試み

4.3 MS124 解釈の妥当性

5 『探究』における「われわれ」—§185 の生徒の位置づけ

結語

『哲学探究』§185 において、われわれとは異なった仕方で規則にしたがうひとりの生徒を、ウィトゲンシュタインは登場させている。かれはそれまでわれわれと同じように規則にしたがっていたにもかかわらず、ある時点で突然に奇妙な反応を示す。この生徒は、いわゆる規則のパラドクスを体現する存在だが、われわれにとって、かれはいかなる存在なのか。この問いに答えることが本稿の目的である。また、それによって、かれに対峙させられる「われわれ」のあり方も、浮き彫りになるはずである。

まず、当該節の解釈を通じて取りだされるのは、「規則にしたがう」という概念と、盲目的で自然な反応という位相での実践、すなわち「生のかたち」を共有する「われわれ」である。そして、この「われわれ」の示す共同性が、規則を成立させる基盤であることも確認される。つぎに、この「われわれ」の外になにが想定されているかという点に注目することで、その特徴を明確にする。というのも、ここで外とされた生徒は「われわれ」を解体する可能性を孕んでいる点に、他節とは異なる特徴があるからである。この生徒は、はじめから「われわれ」の外部、たとえば別の共同体にいたのではない。かれはそれまで「われわれ」として十分に認められていたにもかかわらず、ある時点で突然、その外に立ってしまう存在である。しかし、かつて「われわれ」であった「かれ」を認めれば、それが特定の時点やかれという人物であることに必然性はなくなる。さらに、だれか一人ではなく「われわれ」全員がある日突然、一致しなくなることすら想像可能ではなからうか。そのとき、規則を成立させる基盤であった「われわれ」はいない。すなわち、§185 の生徒を想像するということは、かれの存在によって気づかされた「われわれ」そのものを自ら解体するように思われるのである。しかし、ここには誤解があると言わざるをえない。というのは、そのしたがい方において「われわれ」が示すある一定の恒常性によって、規則そのものが確定されており、そして、それこそが「われわれ」という存在の核心なのである。もし「われわれ」全員が別のしたがい方をするような事態が起これば、そのときその規則は成立の眼目を失う。そのとき、さまざまに異なった規則へのしたがい方について云々する以前に当の規則そのものに意味がなくなるのだ。

しかし、その「われわれ」の内部にあらわれうるこの生徒は、どう位置づけられるのだろうか。この問いを考察するために、主立った三つの解釈を参照する。まず、

クリプキの議論において登場する懐疑論者を検討する。しかし、かれはあくまで「プラス」という概念についてわれわれと共有したうえで、その正しさについて懐疑的な疑問を呈すると想定されている点で生徒とは異なっている。ここには、いまだ、われわれとかれの共同性が前提されており、外部者としての生徒を扱ってはいない。つぎに、ダメットの「純粋な規約主義」の解釈を考察する。他の言明と矛盾しない限りで、同意を根拠としてわれわれ自身が規約を採用できるというのが、その特徴である。この解釈においては、生徒のしたがいは、可能なひとつの選択肢となる。しかしこれでは、ウィトゲンシュタインが指摘する、盲目的な反応において一致する「われわれ」という側面をまったくとらえていない。反応という位相での一致である以上、「われわれ」以外の選択肢は、理解不可能なものになるはずであるから。つぎにウィリアムズ、入不二の「超越論的なわれわれ」の解釈をみる。しかし、外部としての他者の存在可能性を認めないこの解釈においては、理解不可能な他者としての生徒を、扱うことはできない。したがって、これらの解釈は斥けられなければならない。

そこで、最後に、ウィトゲンシュタインの手稿 MS124 を検討してみる。そこには「理解しているおとなのように応えながらわれわれとゲームをしていない生徒」という言及がある。これが示すのは、「反応すること」と「言語ゲームをしていること」は同値の関係にはなく、前者の方が後者より広い概念だということである。この間に、§185 の生徒を位置づけることができないだろうか。実際の言語使用で確認できるのは、相手の応答であり、それを手がかりにしてわれわれは言語ゲームを進めるしかない。もし相手が一定の仕方では反応しなければ、ゲームをそれ以上つづけることができない。それに対して、相手が一定の反応を返せば、われわれはその相手とのゲームが成功していると考え、同様の「生のかたち」を生きていると思うだろう。しかし、ここで示されているのは、後者は必ずしも成り立たないという可能性である。さて、この解釈は成功しているのか。これには否定的に答えざるをえない。その理由は二つある。まず、ここで扱われているのは、生徒が「われわれ」と同じように反応していたその段階でしかなく、まったく理解不可能な他者としての「かれ」ではない。そして二つめの問題は、「言語ゲームをしていること」あるいは「生のかたち」を「隠された」規準として採用していることである。その

規準を把握できる立場に「われわれ」が立つ見込みなどない。これらの点から、この試みは挫折せざるをえない。

『探究』における規則の問題は、規則や言語が成立するためには、盲目的で自然な反応という位相で一定の恒常性があることが不可欠だということを明らかにしており、それが「生のかたち」を共有した「われわれ」というあり方である。しかし、§185 の生徒について検討してみると、かれは「われわれ」の理解が及ばない存在であったことに気づく。そして、かれの存在はそのまま「われわれ」のありようを反射しているようにも思われる。かれは、規則についてのわれわれとは別の可能性を提示している。しかし他方で、その可能性は、われわれにとって、理解不可能なもの、決して選択肢にはなりえない可能性として把握されるのみである。われわれにとって可能な唯一の選択肢は、あくまで「われわれ」自身のやり方しかない。しかし、だからと言って、それが即座に「われわれ」であることを保証するわけではないことも、かれは同時に示している。「われわれ」のうちのだれもが、突然「かれ」になって「われわれ」からこぼれ落ちてしまうかわからないままに、根拠のない行為を盲目的におこないつづけている。その共同性とけっして理解不可能な他者が存在する可能性を孕みながら、「われわれ」は日々更新されつづけていると言えるのではないだろうか。

(すがさき・よしの 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学)